

外国語と私 Foreign languages and me

ドイツ語が好き？！

最上 善広

もう10年以上も前になるが、2年間をドイツ(当時は西ドイツ)で暮らしたことがある。ルール大学の客員研究員に招かれてのことだったので、仕事の腕には自信があったものの、ドイツ語の能力はほとんどないまま、ドイツでの暮らしを始めることとなった。

大学(教養課程)での第二外国語はドイツ語で、大学院の入学試験もドイツ語(英語の他に!)で受けたので、全く知識がなかったわけではないけれど、言葉の上での大きな不安を抱えてのドイツ暮らしであった。研究室では英語で通せても、いったん外にでると全くわからない言葉の洪水である。そのときになって、大学で2年間もドイツ語を勉強したにもかかわらず、「生きた」ドイツ語を聞く機会がほとんど無かったことに気がついた。「あのときもっとまじめにやっていたらなあ」と後悔しながら、ドイツ語と新たに付き合うこととなった。

ドイツ語は、主に学術用語として、日本語の中に入り込んでいる。例えば、ナトリウム、カリウムはそれぞれドイツ語で, Natrium, Kalium. 蛋白質は Eiweisz で卵(Ei)と白(Weisz)との組み合わせである。(ところで, sz(エス・ツェット)は、ギリシア文字のベータ(β)みたいな文字を充てるが、多くのワープロソフトではサポートしていない場合が多いので、このままの表記を用いることとする。)その他にマンションの名前に見られる「ハイム」も Heim(英語の home)である。しかしなんと言っても一番流通しているドイツ語はアルバイト(Arbeit)であろう。これが日本語化して、さらにもうひとつの日本語化した言葉とくっついて、アルバイト・マガジンという言葉ができるほど、日常言語化している。これは、もともとは違う言語(ドイツ語と英語)のミックスであり、両方が完全に日本語の単語として同化(帰化?)していることを示している。この様な例の最たるものが、「フリーター」で、free-Arbeiterがさらに変形した結果と考えると、日本語のもつ、懐の深さというか、節操のなさというか、とにかく適応性の高さを象徴している言葉である。

カタカナ化しているドイツ語ばかり聞いていると気がつかないのだが、ドイツ語はやたらと子音が耳につく言葉である。母音の比率の多い日本語と比べると、なんだか地の底からわき上がってくるような響きがある。あるドイツ文学者は、「ゲルマンの奥深い森の中から忍びでてくる様な」という表現をしていたが、思わず納得してしまう。もっともポピュラーな聖歌である「聖しこの夜」を始めてドイツ語で聞いたとき(これらの聖歌の多くはマルチン・ルターが作ったと言われている)、日本語版とは全く違った印象を持ったのを覚えている。

ドイツ語で悩んだもののひとつに、数の表し方がある。35は英語だと thirty five で日本語と一緒にだけれど、ドイツ語だと fünf und dreizig(5と30)という言い方になる。これが知識の上では分かっているにもかかわらず聞き取れない。始めのうちは買い物をして、言われた値段の数字が聞き取れず、常に大きいお札を出してしまい、小銭ばかりが貯

まっていた。

音声ばかりではなく、書いたものでも思わぬ障害に出くわす。ドイツ語には花文字と呼ばれる特殊書体があり、ちょっとしたレストランだと、メニューがこれで書かれている。これがわからない。外国人が出入りするところだと、普通の文字も使われていたり、英語の説明があったりするが、田舎に行ったらそんなサービスもない。ドイツに至る所田舎だらけなので(そこがまたいいのだけれど)、うっかりすると、とてつもないものを注文してしまって途方にくれたりする。

2年の留学も終わり、私のドイツ体験はあまり言語的の上達を見ることもなく終わりを告げたのだけれど、その後思わぬところで「威力」を発揮することとなった。ドイツから帰って1年ほど経って、ソ連(現ロシア)を訪れた。日本の宇宙飛行士第一号という、テレビ局の企画の中で宇宙実験の行うというのが訪問の目的であった。従って、ソ連の宇宙関係の技術者と直接話をする必要があったのだが、ほとんど英語が通じない。こちらはロシア語なんて「スパシーバ」くらいしか知らない。そんなときに、ドイツ語が共通言語として機能したのである。

ソ連の宇宙技術(ロケット技術)は第2次世界大戦でのドイツの技術を取り込んだものである。これはアメリカも一緒に、アポロ計画推進の中心人物は、ペーネミュンデ基地でV2号ロケットの開発に携わっていた、フォン・ブラウンであったし、ソ連ではフォン・ブラウンの上司に当たる、ドルンベルガーが中心となっていた。従って、アメリカもソ連も初めのころはほとんどドイツの技術に頼っていたわけで、そのころの風刺漫画では、宇宙空間ですれ違った米ソの人工衛星が“Guten Tag”とドイツ語で挨拶する場面が描かれていたりした。おそらくソ連では、科学技術の多くをドイツから吸収した結果、ドイツ語をテキストとした教育がなされ、エンジニアや科学者にとってもっとも身近な外国語となったのであろう。

通訳がいなくなって話が续かなくなったときに、ソ連の研究者が、「ドイツ語はできるか」と聞いてきた。思わず、“Ja”と答えたが、一抹の不安がよぎった。私の実力では難しいことは話せない、実験条件の摺り合わせなんかを要求されたらどうしよう。その不安は向こうも一緒だったらしく、あまり難しい話はしなくて済んだ(というより、はっきり言うてできなかった)。あのときにした、昼ご飯の時間設定が私のドイツ語会話の最後だったような気がする。

非母国語をなぜわざわざ学びたいのですか？

松浦 秀治

私は日本語が好きである。それに対して、外国語(非母国語)は嫌いである。なぜならば、非母国語で「考える」ことができないからである。そもそも、「外国語問題」に関する本課題についてもっともらしいことを日本語で考えながら、日本語で本稿を書いていることこそ皮肉な自己満足であり、恥ずかしさでサッサとキーボードをしまいたくなる。そうは言っても、偉そうにあるいはへりくだっても何やら喋って(書いて)しまうのが大学教員の性というも